フェリス女学院大学日文大学院紀要　第九号　（二〇〇二年三月）

芥川龍之介「西方の人」論

―キリスト教的枠組みの払拭―

橘田　直子

はじめに

芥川が自殺した昭和二年七月二十四日の未明は、その死の直前まで「続西方の人」を書いていた。「西方の人」に関しては、作品最終行に書かれているように、昭和二年七月十日に書き終えたものと考えられる。そのような事実から、「西方の人」「続西方の人」は芥川の自殺直前の心理状態と結びつけて多くが論じられてきている傾向にある。その上、芥川が聖書を読みながら最後の眠りについたという事実から、当然、キリスト教を視野に入れて論じているものが多い。「西方の人」「続西方の人」における芥川のキリスト教への関心は、芸術的興味を出るものではないとする研究者も多いが、その見解には言葉の端々に多くその研究者のキリスト教観が感じられてしまうのである。

芥川ではなく「わたし」に寄り添い、「西方の人」「続西方の人」を見直したとき、作品が本当に問いかけたかったことが明らかになる。「西方の人」「続西方の人」は、「わたし」が「わたしのクリスト」を描き出す形式をとることで、「わたし」のキリスト教観を露わにしたものではない。キリスト教は、あくまでも芸術的興味を出るものではなく、単なる材料に過ぎないのである。自殺の事実に惑わされることなく解釈していけば、「西方の人」「続西方の人」がキリスト教の枠組みの中で語られていないことは明らかである。「わたし」には「わたし」独自の枠組みしか存在しない。「わたし」独自の枠組みを表すために、キリスト教という材料を借りてきただけなのである。

「西方の人」「続西方の人」は、「生きる」とは何かということを真摯に問いかけてきている。もしキリスト教的な枠組みに囚われてしまえば、「わたし」はキリスト教理解に到達することの出来なかった寂しい人間となってしまい、「西方の人」「続西方の人」という作品は、そのような「わたし」の限界を示してしまった虚しい作品でしかなくなってしまうのである。「わたし」の主張を、キリスト教に囚われることなく、「わたし」に寄り添って理解するとき、「西方の人」「続西方の人」の中に、「わたし」が「生きる」ことを真摯に問いかける姿というものが、鮮明に浮かび上がってくるのである。

本稿の目的は、「わたし」の主張を「わたし」に寄り添って理解するために、「わたしのクリスト」像を明らかにし、「わたし」独自の枠組みを解明していくことである。

I

「西方の人」「続西方の人」は短い文章の集合体として作品を形成している。これらの短い文章にはそれぞれ小見出しが付けられている。その中でも、聖書の言葉をそのままキーワードとして掲げているものは、非常に重要な位置を占めている。これは、聖書に登場する人物の名前や名称を使用している。これらの名前や名称は、性質として二つのグループに分けることが出来る。a名前や名称を一個の人格として読むものであり、bその名前や名称を象徴として扱い、要素としているものである。aにおいて、その人格はキリスト教の中で理解されているような解釈を与えることが出来ない。「西方の人」「続西方の人」ではキリスト教の理解を遠く離れ、あらゆる人物が何の力も持たない普通の人間として描かれているのである。聖書において当然聖性を持つべき人物はそれを持ち得ず、憎まれるべき人物は必ずしも憎しみの対象ではない。bにおいて代表的な例では「2　マリア」「3　聖霊」などの小見出しが挙げられる。〈マリア〉に関しては、一個の人格としての登場も見られるが、やはり一つの象徴として用いられている傾向が強いのである。〈マリア〉〈聖霊〉は、「永遠に守らんとするもの」「永遠に超えんとするもの」を端的に表すための具象に過ぎないのである。この具象を借りるためにキリスト教を利用したのである。

まず〈マリア〉であるが、「2　マリア」には二種のマリアが見られる。「唯の女人だった」とされる人格の「マリア」であり、「永遠に守らんとするもの」である象徴の〈マリア〉である。聖性を持った聖母マリア像は、完全に黙殺されているのである。〈マリア〉は、些細で何気ない日常生活の場面において感じられるような、穏やかで、温かな雰囲気を持つ要素である。非常に平和的、保守的、家庭的な印象を強く受ける。「永遠に守らんとするもの」とは、身の回りのあらゆる場所で感じられる、穏やかであり平凡であろうとする心持ちや状態を示しているのである。一方、「マリア」は「美しい」という形容を伴って描かれるという特徴を持っている。聖書においては見られない特徴である。このことは笹淵友一氏[1]が既に触れているところでもあるが、なぜ「美しい」という形容をされるのであろうか。「西方の人」「続西方の人」の中で、「美しい」という形容をされているのは、他にも「サロメ」が挙げられる。キリスト教の材料を借りてきているという枠組みの中で、「サロメ」は非難されるべき対象である。しかし実際は「美しい」人物として描かれている。ここに「わたし」独自の枠組みを発見することが出来るのである。この「美しい」という形容は、オスカー・ワイルドの「獄中記」[2]と深く関連している。「マリア」「サロメ」には、唯一〈悲哀〉[3]ということが共通している。「獄中記」において〈悲哀〉というものは、「美しい」という感覚に繋がっていくのである。〈悲哀〉は、「最も感受性の鋭いもの」「人間の感得しうる最高の情緒」「唯一の真理」として最高の名誉が与えられており、熱い眼差しが注がれているのである。したがって、「わたしのクリスト」を生んだときから「人間苦の途に上り出し」、いつも苦しみの内に生きていた「マリア」は「美しい」「マリア」となり、自分ではどうにも出来ない激しい恋の力によって恋した人を死に至らしめた「サロメ」も、〈悲哀〉〈苦痛〉〈苦悩〉を有する人物として、「美しい」という形容がしっかりとあてはまるのである。このようなことから〈マリア〉

も少なからず〈悲哀〉を有しているということができ、「永遠に守らんとするもの」も〈悲哀〉を有しているということが出来るのである。

次に〈聖霊〉であるが、「3　聖霊」の「我々は風や旗の中にも多少の聖霊を感じるであらう」からは、自然界における力強い力の働きや、権力、集団といった力の働きを容易に想像できる。また、「あらゆるクリストたちは聖霊のためにいつか捉われる危険を持って」いるとしていることや、「わたしのクリスト」が「マリアよりも父の聖霊の支配を受けていた」ために「十字架の悲劇」が起こったとしていることから、〈聖霊〉には危険で悲劇的な力の働きがあるということを読みとることが出来る。〈聖霊〉は「わたし」にとって、負の力にもなりうる、ある働きを持った力であるということが言える。「聖霊の子供たち」は「何か美しいもの」を残し得た。それは「聖霊の子供たち」が〈悲哀〉を有していたことに他ならない。〈聖霊〉が悲劇的な力の働きを持っているということにも関連してくるが、〈聖霊〉という要素の背後にもやはり〈悲哀〉が潜んでいるのである。

〈マリア〉〈聖霊〉は全く違った心持ちを表すものではない。〈マリア〉〈聖霊〉は〈悲哀〉というものを同じく背後に背負いながらも、一方は平和的な心持ち、一方は革命的な心持ちへと向かっていく力であるということになる。

「西方の人」「続西方の人」において、「わたし」は革命的な心持ちに熱い視線を注いでいるのである。「ゲエテ」は「クリストたち」の一人であり、大きな関心が寄せられているが、やはり「クリストたち」の一番の代表であり、あらゆる「クリストたち」の収斂されていくところは「わたしのクリスト」なのである。〈マリア〉〈聖霊〉同様、「クリストたち」の具象は「わたしのクリスト」であると言えるのである。「ゲエテ」に強い関心を寄せながらも「わたしのクリスト」に惹かれていくのは、「わたしのクリスト」が「ゲエテ」よりも〈聖霊〉の要素が強いからである。「わたし」には人生を長く平穏に生き抜くことよりも、現状を打破していく力や、「野蛮な人生」をよりよく生き抜く術を後代に残していくことのほうが重要なのである。

II

「わたしのクリスト」は「西方の人」「続西方の人」において、「ジャアナリスト」という規定をされている。これは「わたし」独自の発想である。ジャーナリズムというものは、常に時代とともに存在している。時代の影響を強く受けるために、この言葉の持つ意味合いはその時代によって大きく変化しているのである。「ジャアナリスト」という言葉は、大正後期から昭和初期にかけて、新しい言葉として社会に広がり始めていたようである。それはこの時期のいくつかの辞典を参考にすれば明らかである。

国立国会図書館において、明治期から昭和二年までを中心に、三十五冊の辞典から「ジャーナル」「ジャーナリスト」「ジャーナリズム」のいずれかの言葉が見られた辞典は十冊であった。大正後期からの辞典に数多くこの三つの言葉が表れていたのである。三つの言葉が見られた辞典は次の辞典（波線部論者）である。

①『現代文藝新語辭典』　大正三年　大畑徳太郎著　東條書店

②『現代新語辭典』　大正八年　時代研究會編纂　耕文堂
③『新聞語辭典　修正増補二十版』　大正十二年　竹内猷郎編　竹内書店
④『現代語辭典』　大正十三年　素人社
⑤『最新現代用語辞典　大正十四年版』　大正十四年　秋山湖風・太田柏露編　小山内薫監修　三進堂書店
⑥『最新社会大辞典』　大正十四年　高木斐川著　芳文堂
⑦『外語から生れた新語辭典』　大正十五年　國民教育叢書刊行會編　内外出版協會
⑧『近代文學用語辭典』　大正十五年　勝田香月編　紅玉堂書店・白啓堂書店
⑨『文藝新語辞典』　大正十五年　文藝時代編輯部編　金星堂
⑩『現代國語辭典』　昭和二年　大町佳月編　岡村書店

①の辞典以外にも大正前期の辞典は数多くあった中で、「ジャーナル」「ジャーナリスト」「ジャーナリズム」という言葉の頻出はこれだけであった。しかも①②の辞典において、言葉の説明は非常に簡単なものしか見られないのである。ここから「ジャーナル」「ジャーナリスト」「ジャーナリズム」という三つの言葉は、まだ社会の中でそれほど認知されていなかったと考えられる。他の辞書に関しても、辞書のタイトルに「新語」「最新」といった文字が見られる。これは、その辞典が出版された時期に新しいとされた言葉を中心に収録していることを物語っているのである。「ジャーナル」「ジャーナリスト」「ジャーナリズム」は、日本においてまだ使われ始めたばかりの新しい言葉だったのである。さらに「ジャーナリスト」の意味として、負の意味合いを持つものが多く見られるという大きな特徴が挙げられる。大正後期からの八冊中、④⑤⑦⑧⑨の五冊という大きな割合である。④の辞典では「ジャーナリスト」という言葉に対して、「新聞雑誌記者。又は藝術的良心なく金の爲に亂作する小説家等を輕蔑した言葉」という説明をしており、⑤⑦⑨も同様である。⑧の辞典に関しても、「ヂャーナリズム」という言葉に対して、「雑誌新聞を旨とする意味。營業本位の意味。ヂャーナリズムの文學とは營業本位の書律の方針に依つて支配さるゝ文學。」という説明を与えている。大正後期から昭和初期という時代では、現在のジャーナリストが持つ社会的地位はまだ確立されていなかったようである。そのような状況の中で、「わたしのクリスト」は「古代のジャーナリスト」であると描かれることは、あまりいい印象を与えなかったであろう。しかし「売文の徒」である「わたし」は、「わたしのクリスト」の「ジャアナリズム」を称賛している。「わたし」は「売文の徒」であるため、「わたしのクリスト」とは同業者の立場に立っている。「わたしのクリスト」を称賛する一方で、「わたし」自身は自己卑下の姿勢をとっている。これは「わたし」の語りの戦略に他ならない。読者の本意を引き出すための語りなのである。

Ⅲ

「わたしのクリスト」は、「善いサマリア人」「放蕩息子の帰宅」といった「詩の傑作」を、「詩的正義」という目的のために作り上げていった。「詩的正義」とは、あらゆる状況や事情を一切取り外し、あるべき姿をうたったものであり、全ての拘束を離れたところ

に存在する芸術的な思想である。「わたし」が「詩的正義」について、キリスト教という材料を用いて語っている「20　エホバ」を見てみる。

まず「我々の腰に垂れた鎖」という表現は、「天上の神」が「我々」を拘束していることを示している。「我々」の弱い心はいつでも何かすがっていく存在を求める。「我々」は「天上の神」を作り上げながらも、最終的にその拘束から逃れられなくなり、追い込まれてしまったのではないかと、「わたし」は問いかけているのである。「グウルモンの言葉」が喜びの言葉として捉えられるのも、「天上の神」というものが単なる創造物に過ぎず〈幻影〉であるということを、「我々」に再認識させるからである。しかし「我々」は、「グウルモンの言葉」によって解放されたとしても、それは「我々の腰に新しい鎖を加へ」ることとなり、「古い鎖よりも強いかもしれない」としている。解放された「我々」は、拠り所を失うことになり、何を持って理想を追い求めればよいのか悩まされることになるのである。これは理想の喪失ではあるが、「20　エホバ」では「神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる」としている。これは新たな《神》を「我々」に示しているに他ならない。「わたしのクリスト」は、「天上の神」を説きながらも、度々《神》を意識していたのである。ここに矛盾が生じる。「わたし」も、「あらゆる彼の逆説はそこに源を発してゐる」としている。この《神》という存在は「詩的正義」である。「社会的色彩の強い」「天上の神」は、すべての拘束を離れ芸術的な思想である「詩的正義」とは、全く正反対に位置するものである。「逆説」とはここから生まれている。「我々」が社会の一員として生きていく中では、「詩的正義」を追い求めていくのは非常に難しい。社会の規律や常識がある以上、「詩的正義」からは遠退いてしまうのである。「わたしのクリスト」を常に「人の子」として捉え、聖性を一切廃した「わたし」には、「後代の神学」が解釈した「逆説」は、「退屈な無数の本」でしかなかった。「わたし」にとって「逆説」は、「わたしのクリスト」が《神》を認識していたからこその産物であり、そのような「わたしのクリスト」という人物は、やはり「人の子」でしかないのである。

あくまでも「人の子」でしかない「わたしのクリスト」が復活するという出来事は、人々の想像力による〈幻想〉であるとしている。「35　復活」では、「わたしのクリスト」は「クリストを愛した人々」の想像力に飛躍を与える力を持っていたとされている。「クリストを愛した人々」に対しては発揮できた力も、世界中の人々に対しては時間がかかった。「わたし」にとっては、復活は事実とはし難いものであり、やはり〈幻想〉なのである。その〈幻想〉が具現化されたものが聖書である。続「2　彼の伝記作者」の中で、「わたし」は聖書に関して、「独特の色彩」が加えられているとし、「人工の甘露味」を感じるとしている。「四人の伝記作者」も「クリストが愛した人々」であり、想像力に飛躍を与えられているのである。人々が〈幻想〉を見るためには、「威厳」という非常に重要な要素が必要になってくるのである。「20　受難」において、「（マリアの脳貧血を起こしたことを記してゐないのは新約聖書の威厳を尊んだからである。）」という記述があるが、「威厳を尊んだ」為に、実際にあったと思われる出来事が聖書には記されていないということを「わたし」は主張しているのである。聖性といったものには、常に「威

厳」という要素の存在が見え隠れしているのである。

想像力ということに関しては、〈悲哀〉同様、「獄中記」からの影響を強く受けていると言える。「獄中記」の中で、キリストは想像力によって自分自身の中に神を意識するような姿勢を持っていたとされている。「気分」によって「神の子」にも「人の子」にもなり得るのである。「わたし」の見解は、「わたしのクリスト」が「人の子」でありながらも、「クリストを愛した人々」や「後代」によって聖性を与えられ、崇拝の対象になり得たというものである。

しかし「わたしのクリスト」は、人々によってここまでキリストに仕立て上げられることを予想できたのであろうか。それは続「9 クリストの確信」から考えてみたい。「わたしのクリスト」の「ジャアナリズム」は「勝ち誇る」「確信」のあったために、周囲の人々に威力を発揮したのである。彼は自分の「ジャアナリズム」が具体的にどのように後代に残っていくのか鮮明には想像し難かっただろうが、それでも「確信」だけははっきりと持っていたのである。その「確信」は、「人の子」であるだけに、時々揺らぐこともあった。しかしそれを極力気にせず、「ジャアナリズム」に専念した。それが人々の想像力に飛躍を与え、聖性を獲得させたのである。

Ⅳ

「わたし」は、「人の子」でしかない「わたしのクリスト」にどうしても惹かれていく。《誤記》を考えることによってその問題に迫っていきたい。《誤記》に関しては、あらゆる研究者が言及しており、必ず問題になることである。「西方の人」「続西方の人」において、明らかに間違いである箇所はある。一方で、どちらとも判断できないあやふやな《誤記》というものも存在しているのである。これをどう解釈するかで、作品の持つ意味は大きく異なってくるのである。既に指摘されているものもあるが、再度、三つの《誤記》をここに挙げる。ひとつは、「5 エリザベツ」における《誤記》である。「マリア」は「エリザベツ」の「友だち」ではなく、いとこである。その「エリザベツ」は「ザカリアの夫」ではなく、「ザカリアの妻」である。これは明らかな《誤記》である。二つ目は、〈聖霊〉と〈精霊〉という表記の違いである。〈聖霊〉は、「西方の人」「続西方の人」において、非常に重要な言葉として用いられている。その言葉が「25 天に近い山の上の問答」、「26 幼な児の如く」、「28 イエルサレム」、続「17 カヤパ」においては、〈精霊〉という言葉で表されているのである。作品の中で最も重要なキーワードの一つである〈聖霊〉が、いくつかの文章において〈精霊〉という言葉で表されているというのは、注意を払わなければならない点であろう。三つ目は、「36 クリストの一生」の「天上から地上へ登る」の《誤記》である。これは「地上から天上へ登る」の間違いであるとする誤記説と、そのままの表記で解釈していこうとする説に分かれる。この論争は、佐藤泰正氏[4]の言及に端を発している。吉田精一氏[5]が、「天上から地上へ登る」を「地上から天上へ登る」と引用していたことを指摘したことから、それ以後、この論争が問題となっていくのである。佐藤泰正氏、梶木剛氏[6]、高田瑞穂氏[7]は、そのままの表記で解釈していく立場に立っている。吉田精一氏、笹淵友一氏[8]は、本当は「地上から天上へ登る」の間違いであるとする誤記説の立場に立っている。

「わたし」は「わたしのクリスト」の一生を、「天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子」と表現している。その「梯子」は「土砂降りの雨の中」で傾いているのである。「折れた梯子」という表現から、人生の挫折や失敗を読みとることが出来る。「わたしのクリスト」の一生は、挫折や失敗の一生であったでのである。この「天上」や「地上」という言葉は、物理的な位置を表す言葉として捉えるべきものではない。もしくは、キリスト教の枠組みの中で解釈されるべきものではない。「天上」「地上」は、「マリア」「聖霊」同様、ある事柄を簡略して表すための要素なのである。「天上から地上へ登る」という表現からは、「わたし」の「地上」への熱い眼差しを読みとることが出来る。「天上」「地上」とは、それぞれ「天上の神」《神》というように考えられるのではないか。「わたしのクリスト」は「天上の神」を説きつつ《神》を享受しようとしていたが、その試みに挫折、失敗してしまうのである。それが「天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子」という表現である。決して享受することの出来ない《神》を、「天上の神」を説きながらも、なお追い求めていく「わたしのクリスト」の姿が、「我々」には強く迫ってくるのではないだろうか。これが「わたし」の「我々」に対する問いかけである。

「わたし」は「我々」に問いかける際、同意を求めるような姿勢をとっている。同意を求め、「我々」の本音を引き出そうとしているのである。「わたし」の語りは前述通り、非常に戦略的である。戦略は大きく二つあるが、ひとつは「わたし」の罪悪感を感じさせるような語りであり、ひとつは「我々は～。」という形で同意を求め、本音を引き出そうとする語りである。「売文の徒」である「わたし」には、当然「読者」への意識が働いていたはずである。「読者」に対して、「大目に見てくれるであらう」という表現で「わたしのクリスト」を語っていく。これは、語る内容が人々にとっては受け入れにくいことを「わたし」が認識していることに他ならない。ここに「わたし」の罪悪感を感じることが出来るのである。「西方の人」「続西方の人」を通して、「わたし」は「我々は～。」という形式で語っていく。語る内容が受け入れられにくいという意識がありながらも、読者と一体化する語りをしていくのである。「わたし」は自分自身を低みに置くことで、逆に「我々」に対して自分自身の強い主張というものを表し、正当性を印象づけているのである。「我々」には容易に肯定しがたい事柄を、へりくだった姿勢で問いかけることによって、これまでの「我々」の認識を徐々に崩していこうという思惑があるのである。そこには確固たる自分自身への自信が漲っているが、直接的には感じさせない語りである。

おわりに

これまで「西方の人」「続西方の人」は、芥川の自殺やその時の心理状態、宗教観に囚われ続けながら論じられてくる傾向にあった。それは意識的、無意識的に関わらず、研究者のキリスト教観を伴っている場合も度々あったのである。しかしここまで見てきたように、「わたし」が「わたしのクリスト」という人物を自分が感じるままに、「西方の人」「続西方の人」の中に描いた理由というものは、そのようなところにあるのではない。最終的には救いや拠り所といったものを求めることなく、自らに葛藤を抱えながら、それでも自分

自身に打ち勝っていこうとする「わたしのクリスト」の姿勢というものを描き出したかったのである。そのためにキリストという人物を材料として用いることが、「わたし」の主張を表すのに最も適していた。だから「わたしのクリスト」という表現になったに過ぎない。「わたし」にとってキリスト教の思想は何の意味も持っていないのである。したがって「わたし」の主張を読み取るためには、キリスト教という枠組みを完全に否定した視点から、「西方の人」「続西方の人」を解釈していく必要があった。

「わたしのクリスト」は「人の子」でしかない。人々が聖性を与えて見ているキリストは、「わたし」には受け入れられないことであった。「わたし」は、人々が信じている奇跡や聖性を持ったキリストという人物を、どのように解釈すれば「人の子」としてはっきり認識できるかということを示し、「我々」に問いかけ、さらには同意を求めている。

「わたし」の主張は、「生きる」こととはどのようなことであるかというところにある。人々は《神》というものに気づいているかもしれない状況の中で、それでも「天上の神」にすがって、それを拠り所としている。しかし、結局「天上の神」という存在は、人々が作り出した創造物に過ぎないのである。拠り所としているものが想像の産物であり、真には拠り所としての働きをしないと認識したときに、「わたし」を含め「我々」はどのように「生きる」という行為を考えていくべきなのか、もしくは考えなければならないかということを問いかけているのである。

「わたし」は最終的には明確な答えを出せていない。しかし「わたしのクリスト」のように、現実には到底叶いそうもない「詩的正義」を追い続けることができた人生というものに、非常に惹かれ熱い眼差しを向けているのである。

今回、〈マリア〉〈聖霊〉もしくは「永遠に守らんとするもの」「永遠に超えんとするもの」が、同じ〈悲哀〉を背負って存在しているものであることを指摘できたのは、非常に有意義であったと考える。これに関連して「美しい」ということが〈悲哀〉を有することに繋がることを、「獄中記」との関係の中で指摘できたことも新たな視点を提案できただろう。他にも、「ジャアナリスト」という言葉に負の意味合いがあることや、〈精霊〉という表記があることなど、今までにない問題提起をすることができ、新たな見解を提案できた。キリスト教の枠組みを完全に払拭できたとき、「わたし」の熱い問いかけに気付かされるのである。

「わたし」は人間の創造の産物である宗教には拠らず、真に「生きる」ということを考え、「我々」に問いかけているのである。そうしたときに、「37　東方の人」に見られるような「クリストは『狐は穴あり。空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし』と言った。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかつた、恐しい事実を孕んでゐる。我々は狐や鳥になる外は容易に塒の見つかるものではない」といった見解に、「わたし」が達したことは当然のことである。

そして「生きる」とはどういうことなのか、最終的な答えは出せないまでも、続「22　貧しい人たち」において「――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないであらう」として、「わたしのクリスト」が「生きる」ということをまっとうした姿に引き付けられずにはいられないこと

を主張し、「我々」に問いかけるという形で、「西方の人」「続西方の人」は幕を閉じるのである。

註

（1）笹淵友一　「芥川龍之介とキリスト教―『西方の人』について―」『國文學―解釈と教材の研究』第一一巻第一四号　昭和四一・一二　學燈社

（2）『サロメ』オスカー・ワイルド著　福田恆存訳　改訂第一刷　岩波文庫　平成一二・五

芥川文庫の『サロメ』(Salome;a tragedy in one act. tr. from the French. with sixteen drawings by Aubrey Beardsley. London. Lane. 1912.) の中で、芥川自身が最も注目している一文があり、その一文のみ下線が引かれている。それは"the mystery of love is greater than the mystery of death."であり、サロメが恋の力に支配されている様に非常に興味を持っていたことがわかる。

（3）芥川文庫の『獄中記』(De profundis.15th ed.London.Methuen.1911)の中において、芥川は所々に下線を引いている。その中でも注目していると思われる四つの文章がある。"But behind sorrow there is always sorrow." "Art is a symbol.because man is a symbol." "His morality is all sympathy.just what morality should be." "His justice is all poetical justice.exactly what justice should be."である。

（4）佐藤泰正　「『西方の人』論」『國語と國文學』　昭和四五年二月号　昭和四五・二　東京大学国語国文学会

（5）吉田精一　「芥川龍之介の人と作品―『西方の人』を中心に―」『國文學―解釈と教材の研究』第一一巻第一四号　昭和四一・一二　學燈社

（6）梶木剛　「芥川における知識人と大衆」『國文學―解釈と教材の研究』昭和四五年一一月号　昭和四五・一一　學燈社

（7）高田瑞穂　「『西方の人』の運命と美（その五・終章）」『成城文藝』第六一号 成城大学文芸学部研究室　昭和四六・一〇

（8）笹淵友一　「『西方の人』論」『作品論　芥川龍之介』海老井英次・宮坂覺編　平成二・一二　双文社出版